

『ススキが原』

九谷 六〇

人物表

都筑弘平	(42)	：	会社員・筆名「神谷龍平」
栗原明	(35)	：	映画監督
松村麻耶	(21)	：	女優・「久美」の役
木下隆	(25)	：	俳優・「都筑数衛門」の役
横田主計	(45)	：	家老
小島夕子	(35)	：	会社員
真島幹子	(35)	：	主婦・夕子の同級生
江藤良雄	(45)	：	部長
小笠原守	(60)	：	取締役
有本薫	(40)	：	殺陣師
都筑兵衛	(50)	：	数衛門の父親
都筑絹	(48)	：	数衛門の母親
侍 A	(42)	：	久美の父親
腰元	(20)		
浅川百合子	(18)	：	女優
スタッフ A	(28)	：	男
スタッフ B	(35)	：	大道具担当・男
社員 A		：	女
社員 B		：	女
社員 C		：	男
侍 B			
侍 C			
侍 D			
事務員		：	男

○パールマンション・全景（朝）

三階建ての洒落たマンション。

○同・都筑の居間・中（朝）

ベランダで植木に水を遣っている都

筑弘平⁽⁴²⁾の姿が見える。

○神田明神ビル・全景（朝）

古びたモルタル造りの六階建てビル。

○同・廊下・中（朝）

都筑が、狭い廊下を歩いている。

都筑が、マーティカ^(株)マーケティング部の看板が掛かるドアの前で立ち止まる。

○同・部屋・中（朝）

所狭しとデスクが並んでいる。

誰も居ない。

都筑が部屋に入り、歩きだす。

入り口に小島夕子⁽³⁵⁾が立つ。

夕子「都筑さん、転職されて半年経ちますけど……地下鉄通勤、慣れましたか」

と大きな胸を揺らしながら都筑に近づく。

都筑が振り返り、夕子と向かい合う。

都筑「駄目ですね。あの地下鉄は、車両が小振りなんですよ。車内は狭苦しいし、座っても前に座っている人がすぐ目の前って感じで落ち着きません。それに立っている人も二列がやっと。三列になると、もうラッシュ並み……」

夕子「騒音はどう?」

都筑「トンネル自体も小さいんじゃないかな。それに曲がりくねっている。五月蠅いっただらないですよ。曲がる時なんかレールと車輪が磨れて、キーキー言って神経が変になるんじゃないかと心配です。この音を聞いて入社ですよ、滅入っちゃう。これから仕事が始まるって言うのに」

夕子「本でも読めば気が紛れるんじゃないですか」

都筑「僕は車内で本や新聞を読まないことにしているんだ。だって、どんなに体を小さくしても、周りの人に迷惑が掛かるからね。よく居ますよね、人に背中を押し付けて平気で新聞読んでる人が……。そういう人の気が知れない」

夕子「でも……他に、交通機関はないんですよ」

都筑が頷いて、

都筑「我慢する以外にないですよ」

夕子「……会社の事で何かあったら、いつでも相談に来てくださいね」

都筑が敬礼をしながら、

都筑「はっ、人事部小島主任！ 宜しくお願
いいたします」

夕子が嬉しそうに部屋を出て行く。

○都筑の居間・中（朝）

ベランダで植木に水を遣っている都筑の姿が見える。

ソファアの横にある電話が鳴る。

都筑が居間に入ってくる。

都筑がソファアに座り、受話器を耳に当てる。

都筑「はい。都筑です」

栗原の声「都筑さん……？ あのー、神谷さんかみやは、いらつしやいますか？」

都筑の声「神谷？ あっ、そうか」

都筑「はい、神谷ですが……」

栗原の声「良かった。実は、神谷さんが書いた薄が原ですが……映画にしたいんです。

宜しいですか」

都筑の声「映画……？」

都筑「あのー、どう言うことですか」

栗原の声「東山さん……ご存知ですよね、お友だちの……」

都筑「ええ」

栗原の声「一昨日、東山さんの所に遊びにい

ったんです。その時にこんなのあるけどと、薄が原を渡されたんですが、酒を呑んでいきましたので気軽に預かっちゃいまして……。でも、読んだら結構面白い。実は昨夜、脚色してみたんです。見ていただけませんか」

都筑「……今日は、日曜ですので家におりますが……」

栗原の声「そうですか。じゃー、これからお邪魔しても良いですか！」

都筑「えっ！　そ、そうですね、これと言つて用事ありませんので……」

栗原の声「良かった。実は、お宅のそばで携帯してるんです。今から、お邪魔します」

都筑が、受話器を置きながら、

都筑の声「来るったって……」

と腕時計を見る。

都筑の声「今、朝の六時半……。随分、勝手な人だね。それに、自分の名前も言っていない。そばまで来てる？　じゃー、すぐ来るんだ」

チャイムが鳴る。

都筑が立ち上がってインターフォンの
受話器を耳にする。

栗原の声「さつき、電話した栗原です」

都筑「わ、判りました」

都筑が、受話器を置く。

○同・玄関・中（朝）

都筑が、玄関の扉を開く。

入り口に無精髭を生やし、目を真っ赤
にした栗原明(35)が立っている。

都筑「ど、どうぞ」

栗原が、頭を搔きながら入ってくる。

○同・居間・中（朝）

テーブルに黒い綴じ糸でまとめられ
たシナリオが置いてある。

栗原「済みません。お休みのところ。これが
シナリオです。最近、漢字を読めない人が
増えましたので、題名を、カタカナのスス

キが原に変えました。読んでくれますか」

とシナリオを都筑に渡す。

都筑「……」

栗原「済みません、徹夜でしたので……。神

谷さんが読んでる間、ちよつと眠らせてく

ださい」

栗原はシナリオを手渡すなり、ソファ

ーに横になる。

都筑がシナリオを手にして眺めてい

ると、グーグーといびきが聴こえる。

都筑が栗田を見る。

栗田は眠っている。

都筑の声「この人、結構、凶々しいな。しか

し……シナリオなんて読んだ事がない」

とシナリオをペラペラ捲り、中ほどの

ページに目を落とす。

都筑の声「なるほど、丸が場面だな。その横

が説明で……括弧が台詞……」

都筑がシナリオの表紙を見て、改めて

読み出す。

強張っていた都筑の顔が、読み進むうちに笑顔になっていく。

都筑の声「へー、面白いな。場面や登場人物の動きが良く判る。この人、見栄えは悪いけど凄いな。プロなのかな」

都筑がシナリオをテーブルに置く。

都筑の声「久美も良い。数衛門も控えめで侍らしい……」

栗原が、ムニヨムニヨ言う。

都筑が、ハツとしたように栗原を見る。

都筑「栗原さん、栗原さん。起きてください」

栗原は、ムニヨムニヨ言うだけで起きない。

都筑「栗原さん！」

と栗原の体をゆする。

栗原が、ハツと目を開ける。

栗原「あつ、そうか。で、どうでした」

都筑「面白いですね。面白い。なんだか自分で書いた物語ではないような感じですよ。映像として見てみたいですね」

栗原「そうですか。どんなところが気に入りました」

都筑「久美の描き方です。それに、数衛門ですが、ずーっと後姿か横顔しか見せない。数衛門が、久美と叫ぶ瞬間に顔を大写します。こんなの良く考えましたね。しかも、他の場面では、照明を横か、後ろから当てて顔を暗くする」

栗原「……」

都筑「でも、役者さんは、演技が大変でしょうね。気になるのは最後の場面です。横田の両断された死体はどうするんですか」

栗原「任せてください。それよりも映画化については、OKですか」

都筑「ええ、初めてのことで良く判りませんが、栗原さんの好きにして結構ですよ」

栗原「じゃー、これからスポンサー捜しや資金調達、出演者選びなどを始めます。それから神谷さんとの契約とか原資料ですが……」

都筑「金なんて要りませんよ。手慰みで書いたものですから。それに神谷なんて名前、誰も判りませんよ。私は、本も出したことがないド素人ですから。映画の格を下げるだけでしよう」

栗原「こういう事は、初めてなんですね。でしたら余計なことを考えず、私に任せてください。契約金の件も含め、総てキチンと遣らなければなりません」

都筑「そうですか……。うーん、とにかく栗原さんの好きにしてください」

栗原「ところで……神谷さん。久美のモデルになった人はいるんですか」

都筑が戸惑った様子になり栗原を見る。

都筑の顔付きが徐々に強張っていき、怒った声で、

都筑「居ませんよ、そんな人！ 私が勝手に作りあげたんですから」

栗原がたじろぎながら、

栗原「じゃー、神谷さんの理想の女性なんだ」
都筑「理想の女性？ 栗原さん、そんなことを訊いてどうするんですか」

栗原「いや、済みません。モデルになった人が居れば、俳優を決める時の参考にしようと思っただけですから」

都筑が、独り言のように呟く。

都筑「そうか、映画ということは……誰かが久美をやるんだ……」

栗原「エッ！ 何ですか？」

都筑「い、いえ、別に……」

栗原が首を傾げながら、

栗原「えーと。神谷さん、オーディションやハイライト場面の撮影には立ち合ってくださいませね」

神谷が頷く。

○同・ベランダ・中（夜）

都筑が煙草を喫いながら空を見ている。

都筑の声「久美、妙な事になっちゃったよ。」

薄が原が映画になるんだって。誰かが久美を演じるんだけど……多分、無理だと思っ
な。気に喰わないかも知れないけど、怒
ないですよ」

都筑が空に向かって苦笑いをする。

○マーティカ・部屋・中（朝）

都筑が、デスクに座っている。

他に社員は居ない。

夕子が、入り口から都筑の所に歩いてくる。

夕子「都筑さん、地下鉄、慣れたんでしよう」

都筑「何故、そう思うの？」

夕子「だって、いつも出社するとイライラして額に皺を寄せるのに……今朝は違うから。今だから言えるけど、あのような顔付きって良くないと思うの。周りの人にも移っちゃうし、部屋の雰囲気もキリキリしちゃうと思うの」

都筑「へー、そういうものかな。悪かったね」

夕子「ふふ、謝ることなんてないですよ」

都筑「しかし、さすが人事部主任。良く気がつくね。社内の雰囲気はまだ気を配るなんて、しっかりしてる」

夕子が嬉しそうな顔で、

夕子「でも、あんなに顔をしかめていたのに、どうしたんですか」

何人かの社員が部屋に入り、デスクに座りだす。

社員たちが、面白そうに都筑と夕子を見る。

都筑「実はね、地下鉄イライラ解消法を見つけたんだ。乗客観察……」

夕子「やだー、そんなの悪趣味ですよ」

都筑「悪趣味？」

夕子「そうよ。そんなことしたら相手に失礼じゃない。それに、知らない人に観察されているなんて……私だったら嫌だわ」

都筑「そうかな。観察されるのが嫌だったらキチンといていれば良いのに」

夕子「そんなの変ですよ。車内で騒いだりしない限り、何やってもその人の勝手ですよ。それに、ジロジロ見たりして……怖い人と目が合ったりしたら危ないですよ」

都筑「大丈夫。ジロジロ見たりなんてしていい。それに、皆、自分の世界に閉じている感じがで、周りなんか気にしていないよ。化粧する女の人なんて、まさにそうだと思うな。自分のことをどう考えているのか不思議な気持ちになるよ」

夕子「自分のこと？」

都筑「そう。化粧する姿なんて人に見せるものじゃない。亭主にだって見せちゃいけない。男も女も節度が必要だよ。女性にとつて一番大切なのは、淑やかさだよ」

夕子「あら、随分、古い言葉ね」

都筑「そうかな」

夕子「そうよ。何でもスピードアップしてるのにお淑やかになんかしてたら総てに乗り遅れちゃうわ」

都筑「淑やかかって、ノンビリ、ゆっくりのイメージがあるけど本来は違う。素早い身のこなしや激しい動きの中にも淑やかさはある。要するに内面の問題なんだよ。つまり品だね」

夕子「まあ、品だって」

都筑「そう、見せて良いことといけない事があるのに、今は滅茶苦茶だよ。特に若者は酷いんじゃないかな」

夕子「まあ、自分だって、まだ若者のくせに」

都筑が顔をしかめて、

都筑「小島さん、四十過ぎの男をつかまえて若者なんて言っちゃ駄目だよ」

夕子「あら何故？」

都筑「言われた方は馬鹿にされてるんじゃないかと思うよ」

夕子が、戸惑った様子で、

夕子「そ、そんな積りじゃ……」

社員たちが、ニヤニヤして二人を見て
いる。

都筑「とにかく日本人の良さが薄れている。

品位、謙虚さ……。せめて女性は、そう在って欲しいな」

夕子「都筑さんて、お品が良くてお鼻が高く、お淑やかにしゃなりしゃなりした女性が理想なんですか。そんな人、今、どこ捜したっていませんよ」

都筑「品が良いというのはね、鼻をツンと高くすることじゃないよ」

夕子「都筑さんて理屈っぽいわ。何だかお爺さんと話してるみたい」

都筑「なんだ、今度は、お爺さんか。小島さん、考えてもご覧よ。ああいう女性はね、目覚ましが鳴ってもすぐには起きない。かなり経ってから飛び起きる。寝ぼけ眼で時計を見る。すると時間が無い。トイレに駆け込んで、そして急いで着替える。そのままドアをボタンと閉めてご出勤。化粧は電車の中。不規則でだらしない毎日だと思うな」

夕子「まー、都筑さんてそんな風に考えるんですか。あー怖ッ！ 都筑さんの妄想って凄いわね。私のことも、そうやって観察してるんじゃないでしょうね。止めてくださいよ、変な妄想の材料にするの」

夕子が、体をくねらせて子供がやるよ
うなイヤイヤをする。その度に大きな
胸が揺れる。

○同・別のデスク・中（朝）

社員AとBが小声で話している。

社員A「また遣ってるわ。小島主任。かなり本気みたいよ、都筑さんに」

社員B「本当？ だって小島主任て男嫌いなんじゃないの。何人も言い寄ったけど、皆、振られたって聞いたわよ」

社員A「何だかね、感じる人がいなかったんだって。もう三十五よ。オッパイ揺らしちゃって……」

社員B「でもグラマーよね。羨ましい……」

都築さんに本気なのかしら？」

社員A「ふふ、都築さんと話しているとねえ

……濡れてくるらしいわよ」

社員Bが、目を見開き、顔を赤くする。

○元の場所

都築と夕子が話しを続けている。

都築「妄想の材料になんてしてないよ。小島

さんとは噛み合わないところもあるけど、

節度ある女性だと思っている。……ま、ま

さか、君、車内で化粧なんてしないよね」

夕子「私は、お淑やかでもお品が良いとも思

っていませんけど、車内でお化粧なんかし

ません。しかめっ面で出社されるのも嫌だ

けど、観察なんて絶対に止めた方が良いと

思います」

窓側のデスクに座る江藤良雄⁽⁴⁵⁾が、

江藤「さー、お二人さん。なかなか面白い話

だが、そろそろ時間だよ。都築君、仕事を

始めてくれないか」

社員たちが詰まらなそうな顔をする。

夕子が、アラツと驚いた様子で腕時計を見て、

夕子「済みません」

と大袈裟にお辞儀をして部屋を出ていく。

○都筑の居間・中（朝）

都筑がソファで腕を組み、考え込んでいる。

都筑の声「そうだよな……久美のような女なんていないよ。栗原さんには、OKって言っちゃったけど……断った方が良いな。久美に失礼だ」

電話が鳴る。

都筑が受話器を取る。

都筑「はい」

栗原の声「神谷さん、スポンサーが付きましたよ。結構奮発してくれました。どこだと思いません」

都筑「そんなこと、判りませんよ！」

栗原の声「あつ、はっはー、そりやそうですね。実は、製紙会社なんです。一時、日本家屋が敬遠され、洋風建築が流行りましたよね。ところが、また和風が見直されだしているそうなんです」

都筑「和風……ですか」

栗原の声「ええ。日本家屋だけでなく、洋風建築の中に日本間を作ったりするのが流行りそうなんですって。今度の作品では、障子が大きな意味を持っていますよね。それに、この会社の社長が、私の作品、特に日本間の描き方を気に入っているそうなんです。条件は、障子の美しさをトコトン描けます。私もそのつもりですので問題はありません。この製紙会社だけで資金は、OKです」

都筑「そうですか……」

都筑が困った顔をして、

都筑「あの一、言い難いんですが……」

栗原の声「何ですか。言ってください」

都筑「実は、映画化ですがお断りしようと思
って……」

栗原の声「エッ！」

栗原が、怒った声で、

栗原の声「断るってッ！ 神谷さん、今更な
に言ってるんですか。スポンサーも付いた
し、もう準備は進んでるんですよ。どう言
うことですか！」

都筑「女優ですが……久美を演じられる女優
なんていないですよ。若い女優なんて、皆、
チャカチャカした感じでしょう」

栗原の声「(普通の声で)……そう言うことで
すか。神谷さん、今日、お会いできません
か」

都筑「……判りました」

都筑が、困った顔のまま受話器を置く。

○喫茶店「ランボー」・全景(夕)

古い造りの落ち着いた店。

○同・中（夕）

都筑と栗原が座っている。

二人とも強張った顔をしている。

都筑「栗原さん、久美は、スラッとしているけど、着物を通して仄かに肉感的な感じがする女性です。うりざね顔で目は大きい。額は広めで理知的な雰囲気。唇は小さめだけど、やや肉厚。ぽってりとした感じですよ」

栗原は真剣な顔で聞いている。

都筑「身のこなしは、ゆったりと淑やか。それでいて毅然としている。そして、一番印象的なのは、目です。強い意志と憂いを帯びた表情……。そんな女優なんていないでしょう。ご迷惑をお掛けしますが、無かったですに……」

栗原は、都筑を睨んでいる。

都筑「私は、何も知らない素人です。深く考えもせずにOKしちゃって……お恥ずかしい限りです」

と頭を下げる。

栗原が背筋を伸ばし、

栗原「私は撮りますよ。神谷さん、貴方、何人の女優を知っているんですか。どうせテレビのバラエティーに出てるジャリタレぐらいしか知らないんでしょう。だから、いないなんて言うんですよ」

都筑「……それはそうですが、久美みたいな女は、今の世にいませんよ」

栗原「久美、久美って言ってますけどね、貴方は、モデルはいないし理想の女でもないって言ったじゃないですか。何、入れ込んでいるんですか！ 久美は、只の想像の女でしょう。馬鹿馬鹿しい！」

都筑が怒り、大声で、

都筑「馬鹿とは言い過ぎでしょう。良いじゃないですか、私が久美を好きになっても！」

店の客が、驚いて都筑を見る。

都筑が、ハツとして赤くなる。

栗原が冷静な顔で、

栗原「神谷さん、今、久美が好きになったつ

て言いましたね」

都筑は顔を赤くしたまま、頷く。

栗原「じゃー、こうしましょう。今度の土曜日、三時から久美のオーディションをしますので立ち会ってください。気に入った女優がいなければ私も考え直します」

都筑が顔を上げて、

都筑「オーディション……ですか」

栗原「ええ、霞スタジオで遣ります」

都筑「わ、判りました。ところで……霞スタジオって？」

栗原が笑顔になって、

栗原「いやー、面白い名前でしょ。正式には麻布スタジオって言んですが、貧乏監督たちが使うスタジオなんです。皆、金がなからいつも腹を減らしている。まるで霞を食ってるようだってんで、こんな名前で呼ばれてるんですよ」

都筑「違いますよ、場所ですよ！」

栗原が、頭を掻きながら話す。

都筑は頷きながら聞いている。

○JR山手線・中

落ち着かない様子の都筑が吊革につかまっている。

○街中・道・中

都筑が、キョロキョロしながら歩いている。

○麻布スタジオ・入り口・前

御影石で出来た立派な門があり、麻布スタジオの大きな看板が掛かっている。

○同・内部・全景

広い敷地に倉庫のような三棟の建物がある。

蔦に覆われた壁はボロボロで、モルタルが剥げ落ち、金網が見える。

都筑の声「まるで幽霊屋敷だな。栗原さんのビデオを見たけど、幽玄な感じで綺麗だった。こんな所で作ったのか。やだな映画って。全く虚の世界だよ」

都筑が敷地内を歩く。

プレハブ造りの大きな二階建ての建物がある。

都筑の声「多分、これだな」

都筑が、建物に向かって歩く。

入り口にスタッフA(28)が立っている。

スタッフAは、ヒョロヒョロの長身で、

ヨレヨレのジーンズを履き、髪は長く

ボサボサ。顔には無精髭。

都筑が、スタッフAに近づく。

都筑「神谷ですが……」

スタッフA「あつ、神谷先生ですか、監督が

お待ちかねです、どうぞ」

都筑の声「先生？ こいつ、何言ってるんだ」

スタッフA「先生、どうぞ」

と都筑を建物の中に連れて行く。

○同・オーディション会場・中

だだっ広い、清潔な感じの部屋。

床は、板張りで掃除が行き届き、綺麗。

栗原が、デッキキチェアのような椅子に座って足を組んでいる。

五、六人のスタッフが居る。

入り口から神谷とスタッフAが入って来る。

栗原が神谷を見て、さっと立ち上がり、

栗原「先生どうぞ」

と自分の隣の椅子を指す。

都筑が立ったままで、

都筑「栗原さん、その先生って言うの、止めてくれませんか。私は大嫌いなんです。そう呼ばれている人間に、碌な者はいない。絶対に止めてください」

栗原「神谷さん、これがしきたりなんですけど……」

都筑が怒った顔で、

都筑「しきたりもクソもない。嫌なものはい

ヤなんです。神谷と呼ぶようにしてください！」

栗原が顔をしかめて都筑を見る。

都筑は真剣な顔をしている。

栗原がスタッフの方を向き、大声で、

栗原「神谷先生を、これからは神谷さんと呼ぶように。いいね！」

スタジオ内に苦笑が洩れる。

都筑と栗原が椅子に座る。

栗原「神谷さん、数衛門役は、木下隆に決まりました」

都筑「エッ！ 今、女性ファンを虜にしている俳優ですよ。栗原さん、結構やりませんか。でも、久美が決まらなければ……」

栗原は、都筑を無視して、

栗原「蓮見一郎が、横田主計と横田社長役を一人二役で演じます。今日のオーディションですが、浅川、結城、松村の三人です。

この三人、知ってます？」

都筑「いいえ。済みません。余り詳しくない

ので……」

栗原「そうですか。やはりね。えーと、三人には台本を渡してあります。久美が横田主計に苛められる場面と数衛門を迎える場面を遣ってもらいます」

都筑「判りました」

ジーンズにTシャツ姿の浅川百合子(18)が入ってくる。

百合子は、整った顔立ちでスタイルも良く、髪の毛を束ねてひきつめている。

神谷と栗原の前に来て、

百合子「浅川です。栗原監督、神谷先生、

今日は、よろしくお願いしマース！」

と大袈裟にお辞儀をする。

都筑が、ムカツとする。

スタッフたちのクスクス笑う声が聴こえる。

栗原「じゃー、自分なりにやってください」

浅川「はい」

とスタジオの中央に立つ。

○同・トイレ・中

都筑が、小便をしている。

都筑の声「浅川さんも、結城さんも綺麗だけど明るすぎる。それに淑やかさが無い。やはり、久美を遣れる女優なんていないな。三人目も、きつと同じだよ……。映画化なんて無理だな」

都筑が諦めの表情をする。

○同・オーディション会場・中

栗原とスタッフたちがいる。

都筑が、椅子に座る。

入り口から髪の毛を肩までストレートに伸ばした松村麻耶⁽²¹⁾が、台本を持って入ってくる。

都筑と栗原の前に立ち、

麻耶「松村麻耶です。よろしくお願いします」

と軽く頭を下げる。

都筑の声「やはり同じ感じだな。でも見た目は……。久美に似ているかな……。いや、違う

な」

スタッフたちが、首に掛けたタオルで汗を拭っている。

栗原「神谷さん、ちよつと部屋が暑くなりましたが、このまま続けます。じゃー、松村さん準備して」

麻耶が、スタジオの中央に行き、台本で顔を扇ぐ。

都筑は、じつと麻耶の行動を見ている。麻耶が、体を屈めて台本を床に置くと、長い髪が顔に掛る。

麻耶が目を閉じたまま、長い髪を両手で掬い上げながら体を伸ばす。

麻耶が、そのまま両手を頭に持っていき、閉じていた目をゆつくりと開く。

都筑が驚いた顔をする。

都筑の声「久美っ！ まさか……」

都筑が急に立ち上がり、大声で、

都筑「誰かッ！ 誰か、輪ゴムか何かを持つ

ていませんか。松村さんの髪をアップにしたいんですが！」

スタッフの一人が、カチューシャを麻耶に渡す。

都筑「松村さん、済みませんが、それを使って顔全体を見せてくれませんか……」

麻耶がカチューシャで髪をアップにする。

都筑「そ、そうです。ありがとうございます。それから誠に申し訳ありませんが、そこに座って、三つ指を付けてもらえませんか」

栗原は、黙っている。

麻耶が正座して三つ指を付く。

都筑「松村さん、挨拶をするように頭を下げてください。えーと、頭を下げている時は、目を閉じていてください。そして、ゆっくりと顔を上げながら……閉じていた目を静かに開いてくれませんか。そのまま目をはつきりと開き、じつと見つめてください」

麻耶「何を、いえ誰を見つめるんですか？」

都筑「誰でもいいです。気持ちとしては、思
いを抱く人を見つめるような、そんな雰囲気
気が良いんですけど……」

麻耶「わ、判りました。やってみます」

麻耶が、ゆつくりと顔を上げながら都
筑を見つめる。

都筑が、ハツとする。

都筑の声「久美だっ！ 久美がいた！」

都筑が凍りついたようになる。

栗原が、ゆつくり立ち上がり、都筑の
肩に手を置き、

栗原「神谷さん」

都筑が、驚いたように栗原を見る。

栗原「神谷さん、久美がいましたね。これで

映画化、本決まりですね」

都筑が、呆然と立ったまま、

都筑「は、はい」

と頷く。

○同・入り口・前

都筑と栗原が立っている。

麻耶が来る。

栗原「じゃー、松村さん、宜しくね」

麻耶「こちらこそ、宜しくお願いたします」

と頭を下げる。

都筑が、麻耶をジーっと見ている。

都筑の声「変だな。久美じゃない」

都筑が首を傾げる。

○喫茶店「ランボー」・中

都筑と栗原が座っている。

栗原「急ピッチで撮影準備をします」

都筑「急いでいるんですか？」

栗原が苦笑いをしながら、

栗原「経費です。長引けばスタジオやセット

の費用が嵩んでいきます。スタッフへの手

当ても日割りです。それに俳優の人達には、

次のスケジュールが入っています。結構、

マネージメントも大変なんです」

都筑「会社と同じですね」

栗原「そうか、神谷さんは会社員だった。お仕事の邪魔になってはいけません。障子の場面、数衛門が金縛りに合う場面には、絶対に来てくださいね」

都筑「勿論です」

栗原「では、土日を割り振ります」

都筑が嬉しそうに頷く。

○撮影スタジオ・中

広い内部一面に、白い穂を出したススキがセットされている。

都筑と栗原が立っている。

浮かぬ顔の都筑。

都筑の声「映画のセットなんて、見るのは初めてだけど……意外とチャッチイな」

栗原「神谷さん、ガツカリした顔してますよ」
都筑「あの一、これはファースト・シーンですよね。物語全体をイメージ付ける重要な場面ですが……私、もつと凝ったセットかなと思っていたので、ちよつと肩透かし

を……」

栗原が笑いながら、

栗原「撮影後、CGを使って編集するんです」

都筑が頷く。

叫び声上がる。

大工道具を腰に吊るしたスタッフB
(35)が倒れている。

栗原、都筑、他のスタッフが駆け寄る。

栗原「大丈夫か」

スタッフB「済みません。釘を踏み抜いちや
って」

栗原「どうしたんだ。君らしくもない。二日

酔いじゃないだろうね」

スタッフB「(ムツとして)昨夜は呑んだりし
ていませんよ。でも変ですね。このセット
では、釘なんか使ってないのに」

スタッフBのスニーカーに血のついた
五寸釘の先が見える。

スタッフの何人ががスタッフBの体
を支え、一人が足を持ち上げる。

スタッフB「ギャーッ！」

スタッフBのスニーカーが見る見る
うちに真っ赤な血に染まる。

栗原「かなり酷いな。ススキのセットは出来
上がっている。幾つかのシーンを撮るのに
は問題ないけど、次のセッティングまでに
傷を治してもらわないと困るな。急いで病
院に行った方がいい」

スタッフのささやく声が聞こる。

スタッフの声「変ね。確かに釘は使っていない
わ。それに、さつき床を綺麗に掃除したの
にね」

急に風が吹き、ススキが揺れる。

○同・隅・中

木下隆⁽²⁵⁾と有本薫⁽⁴⁰⁾が木刀を持って殺
陣の練習をしている。

撮影スタッフがカメラを構えている。

都筑が近付いて来る。

木下が木刀を振りながら、

木下「有本さん、右上うじょう一刀流って、昔からあったんですか？」

有本「良いんですよ、そんな事。剣道の流儀なんて剣豪が好き勝手に名前を付けたんですから」

木下「へー、適当なんですね」

有本「そう、適当。ただ……これは、右上だから右八双の構えを基本にしましたけど」
有本が都筑に気付く。

有本「あ、神谷さん、これで良いですよね」
都筑が照れ臭そうに、

都筑「仰るとおりです。済みません、勝手な名前、付けちゃって」

木下と有本が笑いながら練習を続けている。

撮影スタッフが木下にカメラを向けている。

都筑が、撮影スタッフの後ろに立つ。

都筑の声「大したもんだな。木下さんの後姿と横顔しか追っていない。プロって凄いな」

有本の木刀が木下の額に当たる。

木下「イテェッ！」

と大声を上げて額を押さえ、うずくまる。

栗原が、走ってくる。

栗原「今日は、どういう日だ！」

有本が、木下に謝っている。

栗原「どうしたんですか？」

有本「申し訳ありません。手が滑ったのか、

木下さんを打ってしまいました」

木下は、まだうずくまっている。

栗原「こんな事は初めてじゃないか。名殺陣

師が……」

有本「自分でも判らないのですが……何故か、

木刀が勝手に動いたようなんです。これか

らは気を付けます」

都筑「木下さん、痛みますか」

木下が顔を上げる。

額の左が赤く膨れ上がっている。

木下「監督、これじゃ撮影に影響しますね」

栗原が腕組みをしながら、

栗原「木下さんの顔が映るのは、ワンカットだけです。それまでに腫れが退いてくれればいいが……。念のため病院に行った方が良いでしょう。まさか頭の骨にヒビなんて。いや、変なことを言うのは止めましょう」

都筑も腕を組んで顔をしかめている。

○都筑の居間・中（夜）

都筑が受話器を耳に当てている。

栗原の声「神谷さん、次の土曜日が障子の場面だったんですが、大道具が、まだ歩けません。ほとんど出来上がっているんですが、壊れそうな民家ですので、彼が最終チェックをしないと……。本当に壊れたりしたら、大変ですから」

都筑「で、何日ごろになります」

栗原の声「そうですね……。一週間後には大丈夫だと思います」

都筑「判りました。ところで木下さんはどう

ですか」

栗原の声「ええ、大分腫れも退きました。牛肉で冷やすと利くらしく、勿体ないなんて言いながら冷やしていますよ」

都筑「栗原さん、撮影って大変なんですね。」

もう二人も怪我人が出ている」

栗原「アクション物では良くありますけど、今回のような映画の場合は、滅多にありません」

都筑「そうですか」

都筑が受話器を置き、心配そうな顔をする。

○マーティカ・部屋・中（朝）

都筑が歩いている。

部屋には誰もいない。

夕子が傍に来る。

夕子「都筑さん……」

都筑が振り返って、

都筑「えっ！」

晴れ晴れとした顔の都筑。

夕子「都筑さん……何か、良いことあったんですか」

都筑「別に……」

と振り返ってデスクの方に歩く。

夕子が不安げな顔で見ている。

○撮影スタジオ・中

ススキの中に傾いた萱葺きの家がある。

その前に都筑が立っている。

都筑「これは良い。障子も綺麗だ」

スタッフBが、少し足を引きずりながら近付いてくる。

スタッフB「どうです。今にも壊れそうですよ」

都筑「これ……壊れませんか。近寄るが怖いですよ」

スタッフBが、自慢げに、

スタッフB「壊れそうな形にシツカリと造つてありますから、決して壊れることはありません」

ません」

都筑が、キョトンとした顔になる。

照明係りが何種類かのライトを、いろいろな角度で照らしている。

都筑の声「素晴らしい。あの障子に久美の影が映り、障子が開く。待ち遠しいな」

都筑が目を輝かせる。

栗原と黒地の小紋さつこに先笄かつらの鬘かづらを着けた麻耶が来る。

栗原「リハーサルです」

スタジオ内が薄暗くなる。

麻耶が、都筑に頭を下げて離れる。

民家の障子の中に、ポーッと明かりが燈り、かすかに揺れ始める。

○回想・喫茶店「ランボー」・中

都筑と栗原がいる。

都筑「栗原さん、結綿ゆいわた島田の鬘かづらを使っています。すが、これでは未婚の女性になっちゃいま

すよ」

栗原「ええ、私は、障子の場面の久美は、未婚の女性と捉えた方が良いと思ってます。

初々しさを出すためにも……」

都筑「私は、主計に斬られた時の久美を考えています。つまり、既婚ですよ。鬘は、先筭にしてください」

都筑と栗原が顔を見合わせる。

二人とも厳しい顔付きになる。

栗原「神谷さん、久美は、数衛門と再会して楽しい夕餉をとります。そして、夜を迎えますよね。この場面で久美は恥じらいを見せません。つまり、処女性が必要なですよ」

都筑「確かに処女性は必要です。でも違うんですよよ栗原さん。確かに、久美は主計と夜を共にしていますから、処女ではありません。でもね、肉体的に処女かどうかなんて関係ないんです。良いですか、久美は主計に対し、何らの感情も抱いていないんですよ。主計と寝たからって、そんなのは、蚊に刺されたようなものなんですよ」

栗原「……私は、あの場面で久美の初々しさを表現したいのですが……」

都筑「私も同じ考えです。衣装や鬘は、地味目な既婚女性の物だが、表情や仕草には初々しさがある。こちらの方が久美が引き立ちます。それに……」

栗原「良いですよ神谷さん。何でも言うてください」

都筑「素人ですから口幅つたいようで気になります……白い障子の間に、地味な衣装をまとった久美。久美には、乙女のような輝きがある。この方が良いのではと……」

考え込む栗原が、躊躇いながら、

栗原「うーん、しかし、松村さんに……そのような演技が出来るかどうか……」

都筑が、キツパリと、

都筑「何言ってるんですか。彼女なら絶対に出来ます」

栗原が、エツと目を見張る。

○元の場所

カメラ・リハーサルが続いている。

麻耶が障子の前で立ったり座ったりしている。

都筑「栗原さん、この場面、本番だけに立ち会いたいんですが……」

栗原「良いですよ。えーと、本番は、二時間ほど後に始める予定です」

都筑が頭をちよつと下げて出て行く。

○喫茶店「ランボー」・中

都筑が煙草を喫いながら座っている。

都筑の声「どう言う風の吹き回しでこうなったんだろう。一介のサラリーマンが、自分の小説の映画化に立ち会っているなんて……」

都筑がボンヤリと外を見ている。

都筑の声「それに松村さん……普段は、何とも感じないけど、久美の演技を始めると俺が思い描いていた久美になる。不思議だ……」

…」

都筑が腕時計を見て、立ち上がる。

○撮影スタジオ・中

騒々しい雰囲気になっている。

栗原が腕を組み困り顔で立っている。

都筑が、栗原の傍に行き、

都筑「どうしたんですか？」

栗原「萱葺き屋根の一部が落ちたんです。松

村さんは中にいたんですが、運良く怪我は

ありませんでした」

都筑が、エツと驚く。

栗原「神谷さん、不具合が続きます。何だか、

誰かが邪魔をしているような感じですよ」

都筑が不安げな顔になる。

都筑の声「誰かが邪魔をする……誰が？」

栗原「また、一週間ほど遅れます。その度に

経費が嵩むんですが……」

都筑「経費ですか」

栗原「えー、スポンサーにはスケジュールを

出しています。こう予定が狂っちゃうとスポンサーの負担も増えます。スポンサーは、予定は未定だから気にしないで良いと言ってくれてますが、度重なるとちよつとね。それに俳優たちの次のスケジュールも気になります」

都筑「大変ですね。これ以上、長引くとどうなるんですか」

栗原「……」

都筑「栗原さん」

栗原「改めてスケジュールを組むか、下手するとスポンサーが手を退きます」

都筑「そうすると」

栗原「映画は、中止です」

都筑「中止……」

栗原「映画は、興行での収益を見込んで経費予算を組みます。今回の契約では、中止の場合、掛かった費用の総てを私が背負うことになるります」

都筑「背負うとは、どう言うことですか」

栗原「私の借金になります」

都筑「借金っ！ 何でそんな無茶な契約を結んだんですか」

栗原「制作中止になるなんて考えられない映画です。スポンサーとの契約を急ぎたかつたし、配給会社のプロモーションを早くから実施して欲しかったんです。今までの映画は、すんなり行ったのに……」

都筑「万が一、そうなった場合、返す当てはあるのですか」

栗原が、キツとなって、

栗原「ある訳ないでしょう。今まで三本の映画を作りました。まあまあの評価だったんですが、手元に残った金は大したことありませんでした」

都筑「派手なようで結構、大変なんですね」

栗原「ええ、独立プロですから金策から何から何まで自分でやらなければなりません。映画会社に勤めれば良いのですが、そうすると自分なりの映画が作れない」

都筑「難しいですね。栗原さん、返す当てがないって……どうするんですか」

栗原「数衛門を真似て、何処かに身を隠さなければなりません。それとも……」

栗原が下を向く。

○マーティカ・部屋・中（朝）

江藤の前に都筑が立っている。

都筑「部長、来週の火曜日ですが、有休を頂きたいんですが……」

江藤「君は入社以後、無欠勤だ。有休も余っている。構わないよ。デートかい？」

都筑が慌てて、

都筑「部長、からかわないで下さいよ。そんな女性いませんよ。じゃ、済みませんが」と頭を下げる。

○撮影スタジオ・中

民家の前にカメラがセットされ、カメラマンがスタンバイしている。

カメラマンの横の椅子に都筑と栗原が座っている。

栗原「一週間で修理できましたが……休みの日じゃなくて済みませんでした」

都筑「仕事の方は、大丈夫です」

スタジオ内が薄暗くなる。

栗原「スタート！」

カメラが廻り始める。

障子が明るくなる。

中心は赤く、周りは、淡いほんのりとした明るさ。

障子に人影が映る。

障子の影がゆっくりと大きくなり、

徐々に影が下へと小さくなっていく。

障子が、ゆっくりと開いていく。

光りの中に、三つ指を付き頭を下げた

麻耶が座っている。

麻耶が、ゆっくりと顔を上げ、閉じて

いた目を静かに開いていく。

都筑が目を見開き、麻耶を見つめる。

都筑の声「久美だ。久美がいる。久美が……

久美が、俺を見つめている」

都筑が、ふと、カメラマンを見る。

カメラマンに動きはない。

突然、都筑が立ち上がり、叫びにも近い声で、

都筑「カメラッ！ 何をしてるんだっ！ ア

ップだろう！ ズームしながら久美の顔を

アップ！ 顔を画面一杯に映すんだっ！」

カメラマンが、カメラを操作する。

都筑「そう！ そうだ！ アップだッ！」

麻耶は、落ち着いた姿勢で都筑を見つめている。

麻耶の目は、大きく開き潤み、唇には、

静かな微笑みが浮かぶ。

そのままの状態でカメラが廻っている。

栗原が小さな声で、

栗原「カット」

スタジオ内の動きが止まる。

麻耶もそのままの姿勢でいる。

都筑が椅子に座ろうしたが、椅子を倒してしまふ。

ガタツ！

この音で全員が動きだす。

都筑「あっ！」

と叫び、

都筑「栗原さん！ 済みません。私は……私
は、何てことを。余計な事をしてしまいま
した。済みません」

と頭を下げる。

栗原は何も言わず、じっとしている。
周りのスタッフ達も事もなげに自分
の持ち場で後片付けを始める。
都筑は、その場に座り込み、頭を抱え
ている。

○居酒屋「落人」・全景（夜）

赤提灯が下がる縄暖簾の店。

○同・中（夜）

都筑と栗原が呑んでいる。

都筑「今日は本当に済みませんでした。自分でも何故あんなことを口走ったのか判らないんです。もう撮影には立ち会わない方が……」

栗原「神谷さん、謝らなくちゃいけないのは私の方です。いやお恥ずかしい。シナリオを書いていた時には、久美の顔のアップを考えていました」

とビールを一気に呑む。

栗原「しかし、障子と障子の間で顔を上げる久美の姿は、そのままでも綺麗なものです。障子の白さと久美の姿。この前、神谷さんと衣装について話をしましたが、神谷さんの言うとおりでしたよ。なかなか良い。久美の表情をアップにしなくても画面としては充分に雰囲気を出せます。しかし、アップした方が、さらに久美の美しさを表現できるとは判っていたんです」

栗原が、都筑にビールを注ぐ。

栗原「昨日、最終的にカメラワークを考えたのですが、何としたことかスポンサーの顔が浮かびましてね、障子を徹底的に美しく……。アップにするのを止めることにしました。障子をそのまま画面に残しておきたかったんです」

都筑「何故ですか」

栗原「予定を大幅に遅らせていますし……。

スポンサーに気を使いすぎたんですね。金がないければ映画を作れません。ありがとうございます。ございました。私の代わりに神谷さんが思い通りの映像を作ってくれた」

栗原が神妙な顔で頭を下げる。

戸惑った様子の都筑。

○都筑のベランダ・中（夜）

都筑が煙草を喫いながら空を見ている。

都筑の声「久美……君は、素敵だ。逢いたい……」

都筑が頭を抱える。

○都筑の居間・中（夜）

都筑がキャビネットからウイスキーの
ビンを出し、キャップを開けてラツパ
呑みする。

そのままビンを持って、ソファーに座
り、また、ラツパ呑みする。

都筑の声「久美……俺は、本当に逢いたいん
だ」

とラツパ呑みする。

○同・中（早朝）

真っ青な顔の都筑がソファーに座り、
ボーっとして、

都筑「久美……」
と呟く。

○マーティカ・部屋・中（朝）

社員が仕事をしている。

青白い顔の都筑が、ポーっとした顔で
部屋に入ってくる。

夕子が後ろから、

夕子「都筑さん、おはようございます」

都筑「……」

都筑は、振り返らずに立ち止まる。

夕子が都筑の前に来る。

夕子が、都筑の顔を見てギョツとする。

夕子「都筑さん、どうしたんですか。何だか
体調が悪いようですよ」

都筑「い、いや、何でもない。ちよっと疲れ
ているだけなんだ」

夕子「そうですか。最近、変ですよ。皆も心
配しています」

都筑「……」

夕子が照れ臭そうに、

夕子「余計なことを言う人がいるんです。恋
人に振られたんじゃないかなんて……。私
は、疲れてるのよって言ったんです。もし
たら振ったのは私じゃないかなんて、変な

こと言う人もいて……」

都筑は、表情も変えない。

夕子「私、本当に心配なんです。無理をしな
いでください。有休も残っているんですから」
都筑「本当に何でもない。気遣ってくれてあ
りがとう」

とデスクに歩く。

夕子が、泣きそうな顔になる。

都筑が、デスクに座る。

江藤「都筑君、例の企画、先方さんと打ち合
わせをしたはずだが、経過を報告してくれ
ないか」

都筑が、デスクにある書類を持ち江藤
の前に行く。

都筑が書類を江藤に渡す。

江藤「報告書か。サンキュー」

と書類に目を通す。

江藤が額に皺を寄せて、

江藤「おい、これは、とつくに契約が成立し
た案件じゃないか」

都筑「済みません。間違えました」

江藤「どうしたんだ、ボケーつとして。君らしくな。最近、遅刻も多いし、真面目に遣ってくれなければ困るよ。打ち合わせは三日前だったはずだ。まとめてないのか」

都筑「は、はい。済みません」

江藤「済みませんばかりじゃ、どうしようもないだろう。君、どこか悪いのか……」

と都筑を、ジ―つと見る。

江藤「都筑君。先方さんとの打ち合わせには山田君も同席していたはずだ。この件は、彼に引き継いでくれないか。君は、疲れているようだ。今日は、帰って良い」

都筑「済みません」

江藤「有休も残っている。何日か休養を取りたまえ。体調を整えてから入社するように、いいね」

都筑が頭を下げる。

入り口付近に、夕子がいる。

都筑が部屋を出ようとすると、

夕子「都筑さん、私、心配です。どうしたんですか」

都筑は、夕子を全く無視して部屋を出る。

夕子「都筑さん……」

と、その場に呆然と佇み涙を流す。

社員が夕子を見ている。

○撮影スタジオ・中

寝不足な顔の都筑と栗原が、セットを見ている。

栗原「神谷さん、会社の方は良いんですか」

都筑「栗原さん、自分の書いたものが映画に

なるんですよ。こんな事、一生に一度かも

知れない。有休は、たっぷりあります。会

社は、退職する時に有休を買い取らなければ

なりません。つまり、金が出ることにな

る。有休を取った方が会社も喜ぶんですよ」

栗原「そうですね。神谷さん、最近、寝不足

なんじゃないですか。何だか顔色が良くな

いですよ」

都筑「ええ。私もこの映画の完成に期待して
いますから、いろいろと考えちゃうんです。
それに、久美が気になって……眠れないん
です」

栗原が、エツという顔で都筑を見る。

○喫茶店「ランボー」・中

栗原と麻耶がコーヒーを飲んでいる。

栗原「松村さん、君、今、恋をしている」

麻耶「どうしたんですか、そんなこと訊いて

……監督らしくありませんよ。栗原さんは、

プライベートなことには口を出さない監督

だって有名なのに」

栗原「ん、まーそう言わずに。別にマスコミ
に流したりしないから」

麻耶が、拗ねたように、

麻耶「そんな言い方は止めてください。仮に
監督が女優の恋人を知ったとしても、マス
コミに流したりする人だなんて思っていま

せん」

栗原「ちよつと言ひ方が拙かったね。謝るよ。

実は、松村さんを見ていると何となく、そんな風に感じるんだ」

麻耶「どうしてでしょうね。監督だから正直に言いますけど……、残念ながら私には恋人なんかいません。それに……これは内緒ですよ。私、まだ恋をしたことないんです。ちよつと寂しいんだけど。でも、何故、急にそんなことを……」

栗原「いや、君の演技を見ていて、ふと、そんな感じがね」

麻耶「どう言うことですか？」

栗原「うん、真に迫るといふか、久美になり切っているからね。久美は、数衛門が好きだが、その思いをあからさまに表に出せない。つまり、内に秘めた激しい恋……。しかし、久美は淑やかな雰囲気を持つ女。久美を演ずるのは難しい。僕は、いろいろと演出を考えた。でもね、僕が考えていた久

美よりも、松村さんの演技の方が久美らしいんだ」

麻耶「監督、私、褒められているんですか」

栗原「そう。僕は松村さんの演技に驚いている。よく野球の選手なんかが、突然、ヒットを打ち出したりすると、化けるって言うよね。最近の松村さんを見ると、そんな感じがする。神谷さんも同じ意見だと思うな。神谷さんがね、松村さんだったら久美を遣れるって自信を持って言ってたよ」

麻耶「そうですか。そう言っていたら、何か嬉しくなります。監督、神谷先生……いけない。先生って言っちゃいけないんですね。私、神谷さんのことを余り聞いていないんですけど、ご自分の作品を映画化するのって、今回が初めてですよね」

栗原「初めてだよ。あの人は、普通のサラリーマンだから」

麻耶「あの方、変わってますね」

栗原「えっ、どんなところが」

麻耶「だって、急にカチューシャをしてくれ
とか、監督の替わりにカメラアップとか：
……。それに……」

麻耶が口を閉じる。

栗原「何なの？」

麻耶「いえ、いいです」

栗原「松村さん、作品に関する事だったら聞
いておきたい。これでも私は監督だ。スス
キが原を代表作にしたいと思っっているから
ね」

麻耶は、コーヒークップを見ながら、
躊躇していたが顔を上げて、

麻耶「久美を演技している時だけなんですけ
ど、何だか、昔、神谷さんにお会いしたよ
うな気になるんです。絶対にお会していな
いはずなのに」

栗原「へー、それはまた面白いね。でも、そ
う感じるのは演技している時だけなんだ」

麻耶「ええ。メイクを落としてお話しする時
なんかは、全然感じないんです。私が最初

にそう感じたのは、オーディションの時なんです。三つ指について、誰かを思って目を上げてくれて言われましたよね。あの時、たまたま神谷さんが前に立っていらっしやったので、私、神谷さんを見つめたんです。そしたら……変ですね。以前、お会いしたことがあるように感じちゃって……」

栗原「多分、神谷さんの理想の女性が久美なんだと思うな。神谷さんは思い入れが強い人なんだよ。多分、松村さんに、その思い入れが移ったんじゃないかな。実はね、モデルになった人が居るのかって聞いたことがあるんだ。そしたら、そんなの居ないって。じゃー、理想の女性なんですね、って言ったら凄い顔をしましたよ」

麻耶「監督、人間て凶星の時には、ムキになって否定するって言いますよね。神谷さん、きつとそれなんですな」

栗原「多分ね。でも自分では気付いていない」

麻耶「……人間て不思議なものですね」

栗原「うん。だから複雑で面白い」

麻耶「あら、だから辛いってこともあるんじゃないですか」

栗原「これは参ったな。君に一本取られた感じだ。ところで、神谷さんのことだけど、彼が居ると演技し難いとか、そういうことはないよね」

麻耶「ええ、全然。むしろ逆です。奇妙な気持ちにはなるけど、安心して演技できるんです」

栗原「へー、これまた不思議だね」

栗原が呟くように、

栗原「神谷さん、久美が好きになったなんて言ってたけど……」

麻耶「えっ？」

栗原「いや別に……。さて、撮影ももうすぐ終る。宜しく頼むよ」

麻耶「はい」

と笑顔になる。

○撮影スタジオ・民家・中

木下が障子の前に立っている。

都筑と栗原が、その後ろに立ち、

都筑「栗原さん、この場面、ワンカットで撮

影するのは無理なんじゃないですか」

栗原「神谷さん、この場面はワンカットなん

です。数衛門が外に出ようとする場面から、

久美と夫婦になるまで、ワンカットで撮り

ます。その方が、時間の流れ、大きく変わ

る心象などを印象深く映像化できます」

都筑「……そう言えば、久美が三つ指を付く

場面もワンカットでしたね」

栗原が頷き、

栗原「さ、本番が始まりますよ」

木下が、半分開いた障子に手を掛けてい
る。

障子の隙間からは、薄が見える。

障子を開けて外を見る木下の後姿。

木下が無理に体を動かそうとするが、

金縛りに合ったように体を動かせない。
木下がフツと力を抜き、肩が幾分下が
る。

都筑の声「自分の死を悟った瞬間……。そし
て、久美と同じ世界に入った喜び……」

同じ姿勢で佇んでいた木下が、急に振
り向く。

木下が戸惑いと、喜びが混じり合った
表情をする。

栗原「顔のアップ！」

木下の目に微かな涙。

木下が大声で、

木下「久美！ 久美ーッ！」

栗原「カメラ、ズームアウト」

左側の襖が開き、麻耶が入って来る。

栗原「久美の顔をゆっくりとアップして」

都筑の声「久美と呼ばれた喜び……久美が、
やっと数衛門と夫婦になれたと悟る瞬間……

……。久美、良かったな」

麻耶が驚きと喜びが混じった複雑な

表情になり、目から涙を零す。

麻耶と木下が向き合い、見つめ合う。

都筑が身を乗り出して、

都筑の声「久美……」

麻耶と木下が二十秒ほど見つめ合い、

ゆつくりと近付き、抱き合う。

栗原「カット！」

都筑は蒼白になり、涙を流している。

○同・事務所・中

机の上に絵コンテが置いてある。

青白い顔の都筑と栗原がいる。

栗原「お陰様で時代物の部分は撮り終わりました。これから現代に入りますが、宅地造成の場面は、ロケにします」

と神谷に宅地造成の場面が描かれた絵コンテを示す。

栗原「ススキ野宅地造成地・来春発売開始！

横田建設の看板ですが、思いつきり大きくします。ブルドーザーの手配も済みました」

都筑「……」

栗原「人骨は、石膏で作ります。シナリオでは、現場監督が掘り出し、社長の横田に報告するが、横田は、警察に届けずに造成を進めろと言う。仕方なしに現場監督は、骨を砕いて土に戻し、酒を掛ける。そして、線香をたてて手を合わせる……。骨を砕く場面ですが、石を使うかハンマーにするか……神谷さん、どう思います」

都筑は、ボーっとしている。

栗原「神谷さん！」

都筑「エッ、あー、お任せします」

栗原が顔を顰める。

栗原「閑静な高級住宅街ですが、ロケ地も決まりました。スタジオで使ったススキだけでは足りませんので、今、手配しています」

栗原が、別の絵コンテを示す。

栗原「これが社長の横田の部屋です。原作では、左の首筋から右の腰まで袈裟懸けに斬られた体が部屋に横たわっている事になっ

ています。両断された横田の死体は、CGを多用してリアル感を出せますが……」

栗原が、神谷を見る。

神谷は、ただボーっとしている。

栗原「神谷さん、聞いてるんですか！」

都筑「き、聞いてますよ」

栗原「ふと、思ったんですが、この場面のナレーションは、どんな些細な火の粉でも降り掛かってくれば、容赦はしない。まさか、あの数衛門が……って入りますよね」

都筑「……」

栗原「要するに、数衛門は、久美と幸せに暮していたのに、ブルドーザーで壊された訳です。そこで、横田を斬る」

都筑「ええ、その通りです」

栗原「でしたら、横田の部屋に数衛門が現れ、驚く横田を斬る。この方が良くないですか」

都筑「……」

栗原「都筑さん、数衛門を出した方が面白い

ですよ。変えて良いですか」

都筑「……任せます。もう、どうでも良いです」

栗原が、怒った顔で都筑を見る。

栗原「どうでも良いなんてっ！ 神谷さん、
どういう事ですか！」

都筑「済みません。寝不足で頭が廻らないんです」

都筑は、気が抜けた顔をしている。

栗原「では、変えますが……。神谷さん、撮影には、立ち合ってくださいますよね」

都筑「……」

栗原が、心配そうな顔になる。

○都筑の居間・中

都筑が、ベランダで植木に水を遣っている姿が見える。

テーブルには、空っぽのカップ・ラーメンや即席ラーメンの発泡スチロールなどが散らばり、ウイスキーの瓶が

ある。

床には、新聞が散乱し、服や下着が脱ぎ捨てられている。

ボーっとした都筑が入ってくる。

都筑がソファーに、ドカッと座り、ウ

イスキーの瓶を取り、ラツパ呑みする。

都筑が、フーツと息をして天井を見る。

都筑「久美……」

電話が鳴る。

都筑は、ボーっとしている。

電話が鳴り続ける。

フツと気付いたように都筑が受話器を耳に当てる。

都筑「……はい……」

栗原の声「神谷さん！ やっと、出来上がりました。明日、試写会をしますので来てくれますか」

空ろな顔の都筑。

栗原の声「神谷さん！」

都筑「行きません」

と受話器を置く。

○マーティカ・部屋・中

困り切った顔の江藤がデスクにいる。

江藤が社員たちを見回しながら、

江藤「都筑君から、何の連絡も入っていないのか！」

社員達は、顔を下げて仕事をしている。

江藤「おいつ、都筑がどうなっているのか、知ってる者はいないのか」

社員Cが立ち上がり、江藤の所に来る。

社員C「部長、ひよつとすると、小島さんが知っているかもしれませんよ」

江藤「えっ、人事部の小島か。そう言えば仕事前に、いつも都筑と話していたな」

社員C「それだけじゃありませんよ。部長が都筑さんに休みを取れって言った日を覚えていますか」

江藤「当たり前だ」

社員C「都筑さんが部屋を出て行きましたよ

ね。あの時、小島さんは、都筑さんて言つて泣いたんですよ。変だと思いませんか。二人は付き合っていますよ。小島さんなら何か知ってますよ」

江藤「なるほど。ちょうど良い。人事から都筑の件で話があると連絡が入っている」と席を立つ。

○同・会議室・前

ドアに人事部会議室の名札。

江藤と小笠原守⁽⁶⁰⁾が話をしている。

小笠原「江藤君、困るよ。都筑君だけど、出社していないと言うじゃないか」

江藤「申し訳ありません。体調が悪いようでしたので、二、三日休めと言ったのですが」
小笠原「それが一ヶ月以上かつ。どうなっているんだ」

江藤「それが皆目……」

小笠原「判らないというのか。診断書があれば、長期有休は問題ない。どうせ受け取つ

てないんだろう。いいかい、このままだと懲戒免職にせざるを得ないよ。彼の経歴に瑕がつくぞ」

江藤「……」

小笠原「皆目判らないと言うことは、電話も入れてないんだろう。君にも困ったものだ。一応、君の人事管理についても調べたが、別に問題はないようだ……」

江藤「エッ！ 取締役、私の事も調べたのですか」

小笠原「当たり前だ。都筑の就業態度は悪くないし、きちんと仕事をする社員と聞いている。君もそのように評価をしていたじゃないか。ところが急にこれだ。人事としては、あらゆることについて調べなければならぬ。上司についても当然、調べる。このままでは、周りに与える影響も良くない。君は、都筑をどうするつもりなんだ」

江藤「申し訳ありません。急ぎ……。ところで取締役、小島さんですが……」

小笠原「小島がどうした」

江藤「都筑の事を知っているのではないかと」

小笠原「小島がっ？ 何を言いたいんだ。二人は付き合っているとでも言いたいのか。」

江藤君、それは確かか」

江藤「いえ、そのような噂が……」

小笠原「君は、はっきりしない男だな。小島は体調を崩して休んでいるよ。診断書も出ている」

江藤「休んでいる……。そうですか。二人が同時に休んでいる」

小笠原「江藤君、どうも君は下衆っぽくものを考えるようだ。小島のところには同僚が見舞いに行ったよ。酷い眼精疲労で、部屋の中でもサングラスをしていたらしい。都筑の件だが、一両日中にはっきりしてくれたまえ。懲戒免職か長期病氣有休か。病氣の場合は診断書を出すように。いいね」

江藤「は、はい。判りました」

小笠原「君……たった一人の社員も管理でき

ないようじゃ……しっかりしなければ駄目だよ」

江藤が立ち上がり、頭を下げて、

江藤「も、申し訳ありませんでした」

と小笠原が部屋を出るまで、同じ姿勢でいる。

○同・マーケティング部・中

江藤が、慌しくデスクに付く。

社員Cが江藤に近付き、腰を屈めて、

社員C「部長、どうでした」

江藤「うるさいっ！ いいな、もう都筑のこ

とは口にするな。余計なことを考えずに仕

事をしろ！」

社員Cは、ビックリして直立不動の姿勢になる。

○小島家・全景（夜）

豪勢な二階建て屋敷。

○同・夕子の部屋・中（夜）

目に隈を作った夕子が、両手で受話器を持ち、切羽詰った顔で、

夕子「ミキ、お願い。明日、会って欲しいの」と涙声で話す。

○喫茶店「シャンゼリゼ」・全景

洒落た明るい雰囲気の店。

○同・中

窓際の席に夕子と煙草を手にした真島

幹子⁽³⁵⁾がいる。

幹子「夕子、あんた三十五でしょう。まだ、そんな中学生みたいなこと言ってるようじや駄目ね。何でそんな風にグズグズしてるのか判らないわ。でも、面白いわね。男が声を掛ける女は、男に声を掛けられない。笑っちゃうわ」

夕子は、体を前に出し揺すりながら、夕子「ねー、そんな冷たいこと言わないで助

けてよ。考えるだけで体が火照ってどうしようもないの。ミキ……」

幹子「夕子、それって判る。辛いわよね。

うちのもねえ、最近飽きてきたらしいの。

馬鹿にしてるわ」

夕子「飽きたって？」

幹子「してくれなくなったの」

夕子「そんな……。でも、そういう時はどうするの」

幹子「簡単よ。世の中には、それだけの男がウジャウジャいるわ。それっぽく流し目をすれば、ひよいひよい付いてくる。夕子だったら、狙った男が尻尾振って寄ってくるわよ。私、保証する」

夕子「……」

幹子「夕子ね、今は、そんな時代よ。楽しまなくっちゃ損よ」

夕子が顔を顰める。

幹子「ちよっと待って、夕子の話ってこういうことじゃなかったわよね。その、都筑つ

て男のことよね」

夕子「ミキ、どうしよう」

幹子「最後の手段ね。住所、判ってんなら押しかけちゃえばいいのよ。果物でも持っていけば絶対に入れてくれるわ。部屋に入っちゃえば、勝ったも同然。看病とか何とか言っただけでも擦ってあげるの。そしてね、手が滑った振りして思いつき胸を押し付けちゃうのよ。夕子の胸は凄いんだから。男ならすぐ手を出すわ」

夕子「でも、そんな事したら、はしたないと思われるわ。それに、都筑さんで、そんな人じゃ……」

幹子「馬鹿ね。夕子って本当に馬鹿。そんなこと言ってるから、いかず後家なんて言われるんじゃない」

夕子「エッ！ ミキっ！ 酷い！」

幹子「同級生だって言ってるわよ。折角、凄いな女の武器を持っていながら何遣ってんのかって。皆、じれったいのよ。夕子だって

結婚すれば私たちと同じ会話ができるじゃない。私たちが会うと凄いわよ。もう、明け透けな話ばかり。あの短大、お嬢様学校なんて言われてるじゃない。笑っちゃうわ」
夕子「でも……」

幹子が大きな声で、

幹子「遣っちゃえば、こつちのものよ！」

周りの客が顔を顰める。

夕子が周りを見て、顔を赤らめる。

幹子は気にせず、

幹子「あんた、私に相談してるんでしょ。」

今までだって、私は親切に答えてるじゃない。

い。たまには私の言う通りにしてみたら」

夕子「……」

幹子「はつきり言うけどね、言う通りにしないんだったら、もう相談なんかしてこないで。電話があっても、私、切るからね」

夕子が体をビクツとする。

○都筑の居間・中

都筑がソファアームに座っている。

電話が鳴り、都筑が受話器を持つ。

栗原の声「神谷さん、上映の日が決まりました。木下さんのお陰かも知れませんが、凄いい前評判です。当日は、絶対に来てくださいね。久美が素敵ですよ」

ボーっとしていた都筑の顔が、急に引き締まる。

都筑「行きます」

都筑が受話器を置き、

都筑の声「久美、もう一度、逢いたい」

と血走った目で微笑む。

○映画館「パラダイス・シネマ」・全景

一戸建ての映画館。

○同・事務所・中

栗原と事務員がいる。

電話が鳴る。

事務員が受話器を取り、話している。

事務員が、受話器を手でふさぎ、

事務員「栗原さんに呼ばれたとか言って、変な人が来ているそうです」

栗原「名前を訊いてください。神谷という人だったら、会場に用意した神谷さんの席までお願いします」

事務員が頷き、話す。

○同・劇場・中

客席は、満員状態。

痩せ細り、目付きも定まらない都筑が座っている。

栗原が、都筑の隣の席に座る。

栗原が都筑を見て、驚いた顔をする。

栗原「神谷さん、どこか具合でも……」

都筑「いえ、別に……。ちよつと、寝不足なだけです」

栗原が顔を戻す。

○市街・中

不安げな顔の夕子が、綺麗なりボンを結んだ果物カゴと地図を持って歩いている。

夕子は、薄手のブラウスにタイトスカート、トの清楚な服装。薄手のブラウスから、歩くたびに大きな胸の膨らみが揺れるのが透けて見える。

夕子の声「ミキの言うとおりにしたけど……。

こんな服装、恥ずかしい」と俯き加減になる。

○パークマンション・前

夕子が立っている。

マンションを見上げる夕子。

○同・都筑の玄関・前

郵便受けに郵便物が溢れている。

夕子の声「都築さん、何日も家に帰っていない

いのかしら……それとも病気……」

夕子の顔が引きつる。

夕子が、インターホンを押し、ドアに耳を近付ける。

夕子が、インターホンを押す。

夕子が首を捻り、ドアのノブを回す。

ドアが開く。

夕子が、鼻を押さえる。

夕子の声「臭い！ 生ゴミが腐ったニオイ！」

夕子は佇んでいたが、意を決したように中に入る。

○同・廊下・中

夕子が歩く後姿。

右手に半分開いたドアがある。

○同・居間・中

散らかり放題の部屋。

夕子の声「都築さんは、綺麗好きなのはずなのに……」

と果物カゴを置く。

○同・廊下・中

夕子の後姿。

前の方にドアがある。

夕子がノブに手を掛ける。

○同・寝室・中

敷きっぱなしの布団がある。

夕子が布団の傍に立つ。

夕子「都筑さん……」

と誰も居ない布団を見ている。

布団の上にボーツと白い霧が湧き上がる。

目を見開き、驚いた夕子の顔。

部屋の半分ぐらいまで広がった霧が、徐々に縮まり、布団の上に、一メートルほどの白い球形が出来る。

球形が変化し、麻耶（久美の着物姿）が三つ指を付いて正座し、頭を下げた姿になる。

目を見張る夕子。

夕子の膝がガクガク震える。

麻耶がゆっくりと顔を上げ、笑顔で、

麻耶「お引き取りくださいませ」

と言い、ニコツと笑う。

笑顔のままの麻耶の姿が、スーッと消える。

夕子がガタガタ震えながら、その場へへたり込む。

○劇場・中

薄暗い場内に満員の客。

都筑と栗原が隣り合って座っている。

栗原が、都筑を見る。

都筑は、静かな表情で前を見ている。

栗原の声「神谷さん、落ち着いているな。良かった」

と顔を前に戻す。

○スクリーン

ススキが原のタイトル。

字幕が流れる。

久美 松村麻耶

都筑数衛門 木下隆

横田主計／横田幸造 蓮見一郎

原作 神谷龍平

監督 栗田明

〇ススキの原（夜）

白い穂を出したススキが一面に生え
た野原。

空には細い三日月があり、月の周りに
星が瞬いている。

N（女性）「冴えわたった寒空には、斬り裂い
たような細い三日月。月の周りを星が取り
巻いております。灯りがなくとも、なんと
か歩けるほどの明るさ。そして、何処まで
も薄の原っぱが続いております。木立と思
えるものはございません。あるのは人の身
の丈ほどの木が数本。どの木も枯れており

ます。見渡す限り、茶色に枯れた薄の葉と白い穂ばかり……。たまに、ヒューツと冷たい風が薄を揺らし、カサカサと音を立てております」

原っぱを歩く都筑数衛門⁽²⁵⁾が、小さく映る。

N 「そんな薄が原を、一人の侍が、力ない足取りで歩いております。体格はガツシリとしておりますが、埃まみれの着物や、もう何日も手入れをしていない月代や垢だらけの顔付きから、この侍が長旅の途中であることが判ります。今にも倒れてしまうのではないかと思うほどの疲れきった様子……。すでに夜も深くなっておりますが、軒先を借りる家もなく、寝床になりそうな小屋もございません。見渡しましても、雨露をしのげそうな木立もございません。薄を敷き詰め、寝床代わりにはと思っではみたものの、この寒さには勝てそうにもなく、ただ歩き続けるしかございません。ここ数

日、何も食べていない体に、この寒さはこたえます」

スクリーンの左奥の方に民家が見える。

N 「この侍が背中をまるめ、トボトボと歩いておきますと、遠くの方に小さな家のようなものが見えてまいりました。ひよつとすると寢床が、とでも思ったのでございませうか、この侍は近づいて行ったのでございませう」

○民家・全景（夜）

今にも崩れ落ちそうな家。

○同・前（夜）

家の前に立つ数衛門の後姿。

N 「茅葺屋根は、あちらこちらの茅が抜け落ちております。それに、柱だけでなく家も傾き、今にも壊れてしまいそうなたたずまいでございませう」

真っ白な障子。

N 「しかし、不思議なことに、障子だけは出来上がったばかりのような、綺麗な様子をしております。真っ白な障子。壊れなかった家には、余りにも不釣り合いな障子でございます。人気は全くございません。耳に入るのは、風にそよぐ薄の擦れ合う音だけ。綺麗な障子を見ますと、何やら薄気味悪さを感じてしまい、この侍も、さすがに中に入る事が出来ません。しばし佇んでおります」

家の前に立つ数衛門の後姿。

N 「この侍は、都筑数衛門。甲津藩五十万石の勘定奉行を勤める、歴とした家柄の侍でございます。世の中とは恐ろしいものでございます。数衛門は、謂れなき噂が元で脱藩し、今は諸国を彷徨う、浪々の身でございます。数衛門は、小さき頃から体は丈夫。しかも頭も良く、凛々しい姿は藩内でも評判でございました。文武両道に長け、特に剣術では、右上一刀流の遣い手として

名を馳せておりました。甲津藩において、数衛門の右に出る剣術遣いはおりません。しかし、いくら優秀であっても、家を継ぐのは長男でございます。数衛門は次男。部屋詰め的身でございました。身を立てるには、他家の婿養子となる以外に道はございません。文武両道に優れ、見栄えも良い数衛門でございます。元服後、いろいろな話がございます。

○回想・都筑家・全景（以後回想）

立派な武家屋敷。

○同・部屋・中

後姿の数衛門と都筑兵衛⁽⁵⁰⁾、都筑絹⁽⁴⁸⁾がいる。

兵衛「数衛門、おぬしの仕事ぶり、剣道に対する真摯な姿勢、父としても快く思っている。だが、このままでは埒があかないのでは
ないか。どうだ、此度の話も実に良い縁組

話。先方は武具奉行の家柄。ゆくゆくは奉行になれる話じゃ」

絹「お父上のおっしゃる通りです。母としても数衛門のこれからが気掛かりでなりません。此度のお話し、お断りでもすれば、もうお話しは来なくなりますよ。そろそろ身を固めたらどうですか。これっ、数衛門、聞いていますか」

数衛門「父上、母上、数衛門は、今のままがよろしいのです。お勤めも剣道も楽しいものです。お部屋を使わせていただいておりますが、ご迷惑でなければ、今少し……」

兵衛「部屋のことなどは、どうでも良い。ましてや迷惑など。おぬしのこれからが問題なのじゃ」

絹「数衛門、貴方、好きなお方でもいるのですか」

数衛門「いえ、そのようなお方はおりません。どうか、兄上が都筑家をお継ぎになるまでは、このまま数衛門の我ままをお聞きくだ

「さいませんか」

三人の姿がシルエットになる。

N 「幾度となく交わされる同じような話。そのうちに両親は、数衛門の縁組みを諦めてしまったのでございます。親類縁者、周囲の者は、良い話がありながら、何故、数衛門が独り身を通すのかが理解できません。町を歩けば、何人もの女が目を留め、数衛門を見遣ります。客を相手にする女たちも何やかやと声を掛けることがございます。ですが、数衛門は真面目に受け答えするだけ。では拙者はこれでと、取り付く島もございません。当然のことながら浮いた話もございませんし、ましてや遊郭などに足を運ぶこともございません。周りからは不思議がられますが、当人は一向に気にもかけていない様子。ところが、数衛門が二十二、三の頃でしょうか、在らぬ噂が立ち始めたのでございます」

女の声 「数衛門様は、久美様がお好きだった

のよ。きつと……」

○通り・中央

右側に一軒、少し離れた左側に一軒、

武家屋敷が見える。

N 「久美は、数衛門より五つ年下。久美は、幼き頃、数衛門と遊んだことがございます。しかし、数衛門の元服後は、挨拶をするにとすらございませんでした。何故、そのよくな噂が立ったのか、理由は定かではありません。しかし、見栄えの良い数衛門が、相変わらず独りでいることに、周りの者が興味を持ったのかも知れません。これは頷けることでございます。幾つもの縁談を断ったこと、興味を示す女子も居ないことなど、とかく下世話な話にのぼってしまうのも致し方ないことでございます。数衛門の幼き頃を知っている者が噂いたします」

通りに子供のシルエットが二つ。

男Aの声 「そういえば、数衛門は、久美とよ

く遊んでいたが……」

N 「数衛門に美しい久美を並べてみますと、お似合いの二人が出来上がってしまったます」

女の声「決まっているじゃないか、数衛門は、今でも久美を好いているんだよ。だから縁談を断るんだよ。へん、宝の持ち腐れだよ」

N 「勝手な思い込みではありませんが、噂をする者たちにとり、これで辻褄が合うのでございませす。特に数衛門に興味を持った女たちは、まるで自分を納得させるかのように、この噂を吹聴したのでございませす。口から口へ、噂は広まっていたのございませす」

○横田家屋敷・全景

立派な門構えの家。

○同・庭・中

大きな庭から部屋が見える。

久美が部屋で文机に座っている。

N 「久美は、十五歳で家老横田主計の元に嫁ぎました。主計は、美しく育った久美を見た途端、権力にものを言わせて嫁にしてしまったのでございます」

○同・部屋・中

横田主計⁽⁴⁵⁾が、侍と話をしている。

N 「主計は、辣腕家。しかも熱心に藩政に取り組みましたので、藩の財政も豊か。良く出来た家老と、藩内だけでなく他藩からの評判も良かったのでございます。しかし、権力者にありがちな人間でもありません。部下に限らず周りの者には傲慢な態度で接します。ややもすれば、人を人とも思わぬところもございました。家老という重責を担う者として仕方がないと言えなくもございません。ですが、あらゆる事、あらゆる人に対して同じような姿勢なのでございます。仕事をしている時はともかく、仕事を離れますと親しく語りかけてくる者などは

おりません。これは当然のことと申せます。ですが、主計は、そのようなことを全く気にする風もございませんでした」

○とある屋敷・庭・中

着流姿の侍 A⁽⁴²⁾が腕を組み立っている。

N 「久美の父親は、主計から久美が欲しいとの申し出を受けましたが、出来れば断りたい思っております。主計は、権力、財力を持つております。本来であれば玉の輿ともいえる話。しかし、父親は主計の人間性に疑問を持っていたのでございます。心優しい自分の娘を嫁がせたとしても、幸せにはなれないのではないか。ところが、役職は寺社奉行所寺社役。家老の話を断るなどもつての外でございます。久美を気遣い、なかなか話しだせずにおりましたが、主計からは矢のような催促」

○同・部屋・中

庭が見える部屋に久美と侍Aが座っている。

N 「ある日、父親は意を決して久美に話したのでございます。久美は、何らの感情も示さずに口を開きました」

久美 「お父上様、お父上様の宜しきよう、お応えいただけますでしょうか」

侍Aが、顔を顰める。

○横田家屋敷・部屋・中

着流しにどてら姿で微笑む主計が座つてお茶を飲んでいる。横に久美が座る。

N 「久美を娶った主計には、今まで見せたこともないような笑顔があったのでございます。主計は、久美の美しさを自慢いたしました。それに久美を大切に扱ったのでございます。笑顔で久美のことを話す主計。周囲の者は、人とは変わるものなどと呆れ顔で話すほどでございます」

○同・部屋・中

額に皺を寄せた主計が腕を組んで座っている。

N 「ところが、二年ほど経ちましたが、主計は久美を理解できなかったのでございます。久美は、自分に心を開いてはくれない。二人でいる時にもあくまで礼儀正しく、まるで、部下のように接する。主計は、心の底からなつかない久美に寂しさを感じておりました。そればかりか、自分に対し、全く感情を表に出さない久美を、不思議な女だと考えることもあったほどでございます。そんな折、主計は、家臣が話す噂を耳にしましたのでございます」

男Bの声 「久美殿は、数衛門を慕っているようでございます」

N 「主計は驚きました。しかし、久美についてはあらゆることを調べております。数衛門とは幼友達だけであつたはず。物心ついた頃から二人は会ってもいないはず。噂は

何かの間違いにちがいない。このように自分を納得させたのでございます」

○とある屋敷・長い廊下・中

主計が歩いている。

侍や腰元が頭を少し下げ、上目遣いで

主計を見ながら擦れ違う。

N 「ところが日が経つにつれ、何とはなしに城内の者たちの態度が変わってきたことに、主計は気が付いたのでございます。噂が広まったのでございましょうか、今までですと、廊下などですれ違う時、相手は頭を下げ、主計が通り過ぎるのを待ちました。ところが、近頃は、チラツと上目遣いに自分を探るような雰囲気を感じるのでございませう」

○横田家屋敷・部屋・中

主計が腕組みをして座っている。

N 「噂について、主計にも思い当たる節がご

ざいます」

主計の声「久美は心からなつかないが……。

まさか……」

N「猜疑心とは恐ろしいものでございます。

一旦、人の心に住みつきますと簡単には消えません。いえ、むしろ日に日に育っていくものでございます。些細な事、取るに足らない話なども猜疑心を煽ってしまいます。消そうと思えば思うほど、返ってその事が大きく膨らんでいくものでございます。主計の顔から笑顔がなくなり、また以前のような主計に戻っていったのでございます」

○同・中（夜）

主計が手酌で酒を呑んでいる。

主計の声「まさか、久美と数衛門が……。いくら数衛門が仕事にも刀にも優れているとは言え、ただの部屋住みの身、わしとは違う。ましてや、二人は幼い頃に遊んだだけの仲ではないか。久美が心を奪われるこ

となどあろうはずがない。下らん噂だ。このわしが噂を気にするなど、どうかしている」

N「これで落ち着きはいたしますが、今度は、数衛門の噂話が気になってまいります」

主計の声「いや待て、数衛門は良い婿養子の話があつても耳を貸さないと言う。このままで良いと言っているようだ。このまま？このままとは、どう言うことなのだ」

N「主計は腕組みをして、あれやこれや考え込む毎が続いたのでございます」

主計の声「久美とは会えないが、同じ城下で久美だけを心に思い、暮らせればそれで良い……。そんな馬鹿な。そのような男が世の中にいる訳がない。だが待てよ。久美はわしに心を開いていない。まさか、久美も数衛門と同じように考えているのではないか。会えなくとも良い、誰の嫁であつても良い、数衛門だけを心に……。いや待て、そのような事があるはずがない。子供で

あればまだしも、大人ではないか」

N 「しかし、振り切っても振り切っても、同じ思いが頭に浮かんでまいります。まさかまさかの連続でございます。自然、藩政にも以前のような迫力が感じられなくなつてまいります。廊下で人とすれ違う時は、主計の方が俯き加減で目を合わせないようになつてまいりました。あの傲慢で居丈高な主計は何処に行つてしまつたのでしょうか」

〇とある屋敷・庭・中

二人の侍が堀に近い所で腕を組んで立っている。

侍B 「あの噂は、本当なのかもしれん。主計殿も気にしているご様子」

侍C 「最近、元気がないように見受けられるが……」

侍B 「ひよっとすると、あの二人は密かに逢っているのでは……」

二人の姿がシルエットになる。

N 「猜疑心とは、自分勝手に大きくなっていくものがございます。同じように噂話も真実から離れた方向に広がっていくようでございます。噂話、そして、このような周囲のつぶやきが、目を追って大きくなっていったのでございます」

○横田家屋敷・部屋・中

真っ赤な顔の主計が、目を開けて寝ている。

N 「主計の頭の中には、猜疑心と噂が渦巻いておりました。寝ることもできず、考えることは久美と数衛門のことばかり。お酒を呑み、忘れようとしたしますが、呑めば呑むほどに久美への猜疑心が募ってまいります。久美を見れば、今まで通りの久美であります」

主計の声「いやまで、何かあるのではないか、何か……」

○横田家屋敷・部屋・中（夜）

真っ赤な顔の主計が酒を呑んでいる。

傍に久美が座っている。

N 「お酒をしたたかに呑んだある夜のこと
でございます。主計は居ても立ってもいられ
ず、久美に訊いてしまったのでございます」

主計 「久美、数衛門に逢っているのか」

エツと驚く久美。

驚きの表情の久美の顔が、次第に冷静
な表情に変わり、毅然とした顔で、

久美 「お話しをいたしましたのは、幼き頃の
み。既に長きにわたり、お顔を拝見したこ
ともございません」

N 「この夜は、これで治まりましたが、お酒
を呑みますと主計は同じことを久美に訊く
ようになっていったのでございます。久美
の答えはいつも同じでございます。日を追
って主計の問いかけは、詰問に変わってい
ったのでございます。事実、数衛門と逢っ
てなどいない久美は、冷静にいつもと同じ

答えをいたします。同じ詰問に対し、判で押したような同じ答えの繰り返し。これが、さらに猜疑心を煽ってしまいます。猜疑心とは、そう言うものでございます」

○横田家屋敷・庭・中

久美が、腰元と花を見ている。

N 「嫁いだ後、久美は広大な屋敷から外に出たこともございません。綺麗に造られた広大な庭を見たり、散策したり、腰元たちと琴を奏でたり、歌を詠んだり……。この事は、主計も知っているはずでございます。恐ろしいことに、繰り返し湧き出てくる猜疑心は、その人間の理性をも壊してしまうようでございます。そして、単なる疑いを事実へと変化させてしまうようでございます。主計にとり、久美と数衛門が逢っていることは事実となってしまうのでございます」

○横田家屋敷・部屋・中（夜）

真っ赤な顔の主計が酒を呑んでいる。

傍に久美が座っている。

N 「ある夜、主計は、いつものように久美を詰問いたしました。いつもと同じことの繰り返してございます」

○同・久美の寝室・中（夜）

久美が寝ている。

真っ赤な顔の主計が寝巻き姿で来る。

主計が布団を捲り、中に入ろうとする。

N 「主計は体を求めますが、久美は疲れ果てております」

久美 「お殿様、今夜は、ご勘弁を」

主計の顔に表情がなくなり、立ち上がって部屋を出ていく。

久美が起き上がり、布団の横に座る。

久美は、何かを覚悟したような毅然とした顔でいる。

刀を持った主計が入って来る。

久美は、顔も向けずに同じ姿勢でいる。

主計が刀を抜く。

久美が微笑む。

主計が久美を斬る。

血が飛び散る。

久美が布団の上に倒れる。

N 「主計は、すでに狂っていたのでしょか」

刀を持った主計が呆然と立ちすくんでいる。

腰元の声 「久美様、久美様、どうかいたしま

したか？ 恐れ入りますが、お部屋に入ら

せていただきます」

部屋に腰元が入って来る。

腰元が叫び声を上げる。

ドタドタドタツと音がする。

三人の侍が刀を持って入って来る。

血が滴る刀を持ち佇む主計。

肩口から血を流し、薄っすらと笑みを

浮かべて倒れている久美。

主計が、ハッと正気に戻った表情にな

り、叫ぶ。

主計「久美めが、白状しおった。数衛門と逢っておったとな。許すことは出来ん、不義密通じゃ！ 久美は、わしが斬った。数衛門を成敗せよっ！」

侍が顔を見合わせ、頷いて部屋を出て行く。

○都筑家・門・前（夜）

五、六人の侍が門を叩いている。

○同・部屋・中（夜）

寝巻姿で立っている数衛門の後ろ姿。

侍が入って来る。

侍D「都筑数衛門、ご家老の命により切腹を申し付ける。さもなくば我らが成敗いたす」
数衛門「何をもって切腹と申されるか。ましてや成敗とは……」

侍D「黙らっしゃい！ ご家老ご正室、久美殿との不義密通。切腹のご沙汰は武士の情。

ありがたく頂戴いたせ」

数衛門が素早い動作で刀掛けの両刀を掴み、障子を蹴破って庭に出る。

侍Dが、数衛門の後ろから斬り掛る。

数衛門は振り向き様、侍Dを袈裟懸けに斬る。

〇とある屋敷・全景（夜）

古びた空き家。

N「数衛門は、家に迷惑が掛かってはいけな
いと、空き家に籠ったのでございます」

〇同・前（夜）

鉢巻、襷掛けの侍たちが家を取り囲んで
いる。

N「中からは物音一つ聞こえてまいりません。
討手たちは、攻め入ることが出来ません。
そのようなことをすれば、暗闇の中、同士
討ちをさせていただきます」

一人の侍が家に入る。

N 「物音一つ聴こえません」

一人の侍が家に入る。

N 「家に入った侍は、幾ら待っても出てまいりません。刀を交えた音も聞こえてまいりません。叫び声も上げずに斬られたのでございましょうか。右上一刀流に敵う者はいないようでございます」

傷だらけの侍が、家から這い出してくるが、バタツと倒れる。

○林・中（夕）

数衛門が歩いている。

数衛門の声 「これが、この世の出来事か。なんと理不尽なもの。愚かな人間の猜疑心から、罪もない久美殿が殺された。私は藩を捨てざるを得なかった。しかも、討手となった自分の友と、刃を交えなければならぬ。対峙すれば、友であっても刀は何の躊躇もなく友を斬ってしまう。自分の意志とはかけ離れた所作。謂れの無い噂。自分に

罪があるのだろうか。だが、このような事にて、むぎむぎと斬られる訳にはいかない」

三人の侍が走っている。

数衛門の後姿。

三人の侍が数衛門に追いつく。

侍たちが刀を抜き数衛門を取り巻く。

三人が数衛門に斬り掛かる。

数衛門は、一人の胴を払い、一人を袈

裟懸け、一人を突きにて倒す。

刀を持って佇む数衛門のシルエット。

数衛門の声「何人の友を斬ったであろうか。

私は人を信じすぎた。身を綺麗に毎日を過

ごせば人に迷惑は掛けないと思っていた。

ましてや、自分に災いなど降りかかるとは

思ってもいなかった。もうご免だ。これか

らは降りかかってきた火の粉は、どのよう

な小さなものであっても、まず消すことに

する。そのために人を斬っても構わん。一

人を斬るだけで済むではないか」

○田園・中

月代を伸ばし無精髭、埃塗れの数衛門が歩いている。

数衛門が、木に登り柿を取っている。

数衛門が地蔵堂に供えられた握り飯を盗り、貪り喰う。

(回想終わる)

○ススキの原・中(夜)

数衛門がトボトボと歩いている。

○民家・前(夜)

佇む数衛門の後姿。

数衛門の声「何故、障子だけが綺麗なのだろうか？」

N「何の気配も感じません。数衛門は、障子を眺めながら、じっとしておりました」

障子にポーと灯りが映る。

N「誰かが蝋燭を灯したのでございましょうか」

数衛門の声「誰か居る！」

N 「数衛門の驚きは、大きなものでございました。剣の道を極めた者は、殺気だけでなく、人の気配を感じ取る研ぎ澄まされた神経を持っているものでございます。先ほどまでは、全く気配すら感じなかったのですぞ
ございます」

障子に影が映る。

影が大きくなり、下に小さくなる。

ゆっくりと障子が開く。

三つ指をつき頭を下げている久美。

久美が、ゆっくりと顔を上げる。

久美が、微笑を浮かべ、

久美「数衛門様、ようこそ」

数衛門の声「久美殿ッ！」

N 「そこに居たのは、美しい面持ちの久美でございました。驚きの余り、数衛門は言葉を出すこともできません」

数衛門の声「久美殿は、主計に殺されたはず。

と言うことは……」

N 「数衛門は、この時、総てを理解したので
ございます」

久美 「数衛門様、お久しぶりでございます。こ
のようにお逢いできますのも何年振りでご
ざいましょうか。やっと二人になれました。
数衛門様、どうされたのですか？ そんな
に驚いたお顔をして……」

佇む数衛門の後姿。

久美 「オホホ、何をそのように不思議がって
……。今、久美は、幸せでございますよ。
さ、中にお入りくださいませ。お話をいた
しませんか」

N 「数衛門は考えました。所詮、理不尽なこ
の世の中。不条理にさえ思える出来事が起
こっている。何が起こるか判らないのがこ
の世ではないか。たとえ、久美殿が、この
世のものではないとしても、話を聞くだけ
であれば……。それに、この幸せそうな面
持ちは余りにも美しすぎる。何故なのであ
ろう。久美殿と、しばし過ごしても良いの

ではないだろうか」

数衛門が部屋に入る後姿。

N 「数衛門は、この世とあの世の境目とも思える、綺麗な障子の中に入ったのでございます」

○同・中

蝋燭が煌き、明るく広い綺麗な部屋。

数衛門の後姿の横に微笑む久美の顔。

数衛門の声「なんと綺麗な部屋であることか。

これが、あの世なのであるうか」

「揺らめく蝋燭の炎。

○同・部屋・中

豪華な夕餉の膳が置いてある。

久美が頬を赤らめて座っている。

久美の横に座る数衛門の斜後ろ姿。

数衛門「久美殿、つまらぬ噂とは言え、申し訳のない事態を招いてしまいました。お詫びしなければと思っておりました」

久美「何をおっしゃいますの数衛門様。世の中とはこのようなものでございます。自らの思いとは異なる方向に、物事は向かうことがございます。その流れに抗うことはできません」

数衛門「……」

久美「……ましてや、好きなお方と一緒にされるなど、所詮、無理なことでございます。決めるのは家と家でございます。町人であればまだしも、武家に生まれた者には、自分の意志などないのと同じでございます。主計様と夫婦めおとになりましたが、私にとりましては、お仕事と同じでございました。何の感情も抱きませんでした。幼き頃より、思うお方は心に秘めておりました。でも、私は嫁いでしまった身。そのお方とは、死ぬまでお逢いできないものと思っております。でも……久美は、それで良いと思っております。数衛門様は、都筑家のご次男。久美には兄上がおります。小さい頃か

ら判っておりました。決して一緒にはなれないと……」

数衛門「久美殿っ」

久美「三年ほど前でございます。主計様が唐突に久美にお訊きになりました。数衛門様と逢っているのかと。幼き頃、お会いしたのみ。もう何年もお会いしていませんとお答えいたしました。私は、何故、主計様が、そのような事をお尋ねになるのか判りませんでした。後日、腰元に問うてみました。話を聞き、久美は驚いてしまいました。数衛門様と私のことが噂になっている。不思議でした。お逢いすることなどなかったのに、数衛門様と久美が噂になっている」

久美が、恥じらいの顔付きで俯く。

久美「数衛門様、久美は、腰元の話聞き、嬉しゅうございました。本当に夢かと思うほど嬉しゅうございました。噂だけでも良い、数衛門様と一緒になれたのだと……でも、これは自分勝手な喜びだと気が付き

ました。数衛門様にご迷惑が掛かっている
のではと心が痛みました」

数衛門 「久美殿、そのような……」

久美 「ところが腰元が申しますには、数衛門
様は、いろいろなお話がおありになるのに、
全く耳をお貸しになられていないと。久美
は、もしやして数衛門様は……。そのよう
に思った途端、胸がときめいてしまいまし
た。はしたない事とは思いましたが、胸の
ときめきは治まりませんでした」

数衛門 「久美殿、拙者……」

久美 「数衛門様、何もおっしゃらないでくだ
さいませ。今はこうして二人きり。久美は、
幸せでございます。久美が斬られたことを
気になさっているようでございますね。久
美が主計様を恨んでいるとお考えですか？
……」

久美が笑顔に戻り、明るい声で、

久美 「ホホホ、まったく逆でございますの。

主計様が狂ったように久美にお訊きになる

たびに、久美の喜びは大きくなりました。主計様のお口から数衛門様のお名前が出るたびに、幸せを感じるようになりました。それとともに、数衛門様にお逢いしたいの思いも膨らんでまいりました。お逢いたい。ただ、一度だけでも良い、お逢いたい。いえ、この世でなくとも良い、お逢いのできるのであれば……。主計様に対しては、何の感情もございませんでした。久美を責める主計様を、嫌いになることもございませんでした。ある夜、主計様は、刀を持って部屋に入ってこられました。久美は斬られると思いましたが、恐くはありませんでした。むしろこの世にお別れができる、ほっとした思いを抱きました。自ら命を絶つつもりはございませんでした。幼い頃から、流れに身を任せようと考えておりましたから……」

久美が目を輝かせて、

久美「数衛門様、今、久美は幸せです。さっ、

もう少しお呑みくださいませ」

数衛門の声「流れに身を任せ、在るがままの自分を受け入れる。私の刀も同じなのだろうか。親しき友とは言え、斬らざるを得ないのも流れの一つなのだろうか」

久美が幸せそうに数衛門を見ている。

○同・別の部屋・中

一本の蝋燭が燈っている。

真っ白な布団の上に、頬を真っ赤に染め、目を瞑り、口を少し開いた久美の顔。

久美の顔の右下に数衛門の後頭部。

○同・中（朝）

整えた着物姿の久美が座っている。

久美の傍に布団が見える。

伏目がちな久美の顔。

久美「お目覚めですか、数衛門様」

数衛門の声「あっ、久美殿、寝過ぎしてしま

ったようです」

久美「ホホホ、お疲れのご様子でした。今は、
お顔も穏やか……。数衛門様、ここでは数
衛門様のお屋敷として、心置きなくお振舞
いくださいませ」

数衛門の声「久美殿は、お休みにはならなか
ったのですか」

久美「数衛門様、そのようなことはお気にな
さらないでくださいませ。久美は、この通
り元気でございますよ」

久美は頬をほんのり赤く染めている。

N「会話こそ弾みますが、久美は数衛門の顔
を見ることができません。昨夜の喜びが思
い出され、顔を合わせるのが気恥ずかしい
のでございます」

○同・屋敷・中

数衛門が長い廊下を歩く後姿。

数衛門が襖を開けて部屋を覗く。

天井には綺麗な絵が描かれている。

数衛門が隣りの襖を開ける。
廊下を歩く数衛門。

○同・部屋・中

数衛門の後姿。前に久美。

数衛門「久美殿、外で見たとときには小さな家
でしたが、中は随分と広いのですね」

久美「まあ、お歩きになったのですか。オホ
ホ、このお屋敷は、何処までも続いており
ますのよ。それこそ何処までも……。入り

口は、あの障子のお部屋だけです」

数衛門「久美殿にお会いした部屋ですね」

久美「ええ、あのお部屋だけ……」

と顔を曇らせる。

○同・中庭

明るい陽射しの中に小さな川が流れ、
草花や木々の葉が輝いている。

久美と数衛門が歩いている。

N「此処は、常に春の陽気でございます。中

庭を見れば、朝、昼、夜と一日が過ぎていくのを知ることができませんが、夜になっても真っ暗になることはございません。何処からともなく柔らかな光が差し込んでまいります。そして、桜や椿、木蓮が咲いております。大きな池の周りには菖蒲や杜若。池には、桃色の花をつけた睡蓮がそよ風に揺れております」

久美「数衛門様、このお庭は不思議なんですよ。久美が好きなお花たちが、いつも綺麗に咲いてくれます。散ったりいたしません」

頷く数衛門の後姿。

N 二人の話は、幼き頃の想い出。そして、今、幸せであること……。その間に起こったことは、二人の記憶からは、すでに消え去ったのでございましょうか。数衛門は、何年が過ぎたのか、すでに判らなくなっております」

○同・部屋・中

障子の前に刀を持って佇む数衛門の
後姿。

数衛門が障子を開ける。

数衛門が外に出る。

○同・外（夜）

ススキが続き、空には三日月。

N 「中庭は、春の陽気でございますが、外は
いつも冬の夜。枯れた薄が続き、寒空に三
日月とたくさんの星が小さく煌いておりま
す。そして、冷たい風がヒューヒューと薄
を揺り動かしております」

数衛門が刀を抜き、上段、正眼、下段
と構えを変え、右八双に構える。

数衛門が、刀を右左、上下と振る。

刀が月の光を受け、動くたびに輝く。

○同・部屋・中

久美と数衛門がお茶を飲んでいる。

数衛門 「久美殿、外を歩いてみませか。薄の

穂が風に揺れ、なかなか風情がありますよ」
久美「数衛門様、私は寒さが苦手でございます。
す。それに久美は、外には……」

久美が顔をそむけ、部屋を出て行く。

○同・中庭・中

久美と後姿の数衛門。

数衛門「久美殿、今日の夕餉は私がお作りいたそう。いつも久美殿では申し訳がない」

久美が悲しげな顔をする。

N「数衛門は、久美を気遣ってこのように申したのでございます。しかし、この日、久美の表情は何故か強張っております。数衛門が、この様な久美の寂しげな顔を見るのは初めてのことでございました」

久美が強張った顔で、

久美「数衛門様は、何故、久美と呼んでくださいらないのでしょうか。数衛門様と私は、
夫婦めおとではないのですか。お願いでございます。どうか久美と呼んでくださいませ」

数衛門が久美の肩に手を置くが、すぐに久美から離れる。

N 「夫婦との言葉を聞きますと、数衛門は、下を向いたまま、何も言わずに奥へと行つてしまいます。久美があの子の者であることが、数衛門の頭から離れないのでございます」

○同・部屋・中

障子の前に数衛門の後姿。

N 「数衛門は、久し振りに薄が原を歩いてみたくなったのでございます」

数衛門が障子を開ける。

数衛門が外に出ようとする。

数衛門の体が金縛りに掛つたように固まる。

N 「どうしたのでございましょう、数衛門は、障子の外に出ることができません」

数衛門 「外に出られない。と、いうことは……」

N 「数衛門は、悟ったのでございます」

数衛門 「久美……。二人は晴れて夫婦ぞっ」

数衛門の体が微かに震える。

数衛門 「二人に降り掛かる、どのような小さな火の粉も許さん。誰であっても、拙者は斬り捨てる。二人はいつまでも一緒っ！」

数衛門が大声で、

数衛門 「久美っ、久美っ！ 久美、こちらに来てくれぬかっ！」

○劇場・中

観客が落ち着きなく動き、ざわつく。

栗原の姿。

栗原の声 「ざわついてきたな。お目当ての木下の顔……」

栗原が、都筑を見る。

都筑は、身を乗り出すようにして前を見ている。

アッ！

どよめきが起こる。

○スクリーン

画面には、喜びに満ち溢れ、異様に光る目に薄っすらと涙を溜めた都筑の顔が写しだされる。

○劇場・中

栗原の啞然とした顔。

栗原の声 「どう言うことだ？ これは、これは、どう言うことなんだっ！」

栗原が、都筑を見る。

都筑は、目を瞑り、口を開けてグツタリと椅子に仰け反っている。

○スクリーン

久美と都筑が、じーっと見つめ合っている。

二人は抱き合う。

○劇場・中

都筑が、目を閉じ、ウーンと唸りなが

ら、体を振じらせている。

栗原が立ち上がり、スクリーンに向かって大声で、

栗原「神谷さん！ 駄目だ！ 行っちゃ駄目だ！ 神谷さん！ 戻って来いッ！」
会場が騒然となる。

○スクリーン

久美と抱き合う都筑の顔が、苦しみに歪み、口を大きく開けて目を剥く。

都筑の顔の動きが止まる。

○劇場・中

栗原が、都筑の頬を思いつきり引っ叩く。

○スクリーン

都筑の顔が、ぼやけていく。
ぼやけた顔が、徐々に人間の顔になっていき、数衛門の顔になる。

数衛門が、ニヤツと笑う。

○劇場・中

スクリーンを見詰める栗原。

栗原「な、何故……。何故、ここで数衛門
が笑うんだ」

栗原が、都筑を見る。

都筑が、ハツとしたように目を開ける。

都筑「栗原さん！」

と驚いて栗原を見る。

○スクリーン

場面は、建設現場に変わっている。

○劇場・中

観客の大きな話し声やざわめき。

都筑「栗原さん、私は……」

栗原「良かった……」

呆気に取られたような都筑の顔。

○都筑のベランダ(夜)

空に三日月が見える。

都筑が、煙草を喫いながら三日月を見ている。

都筑が、搾り出すように、

都筑「久美……」

と呟く。

三日月に群雲がかかり、徐々に空が暗くなる。

(了)